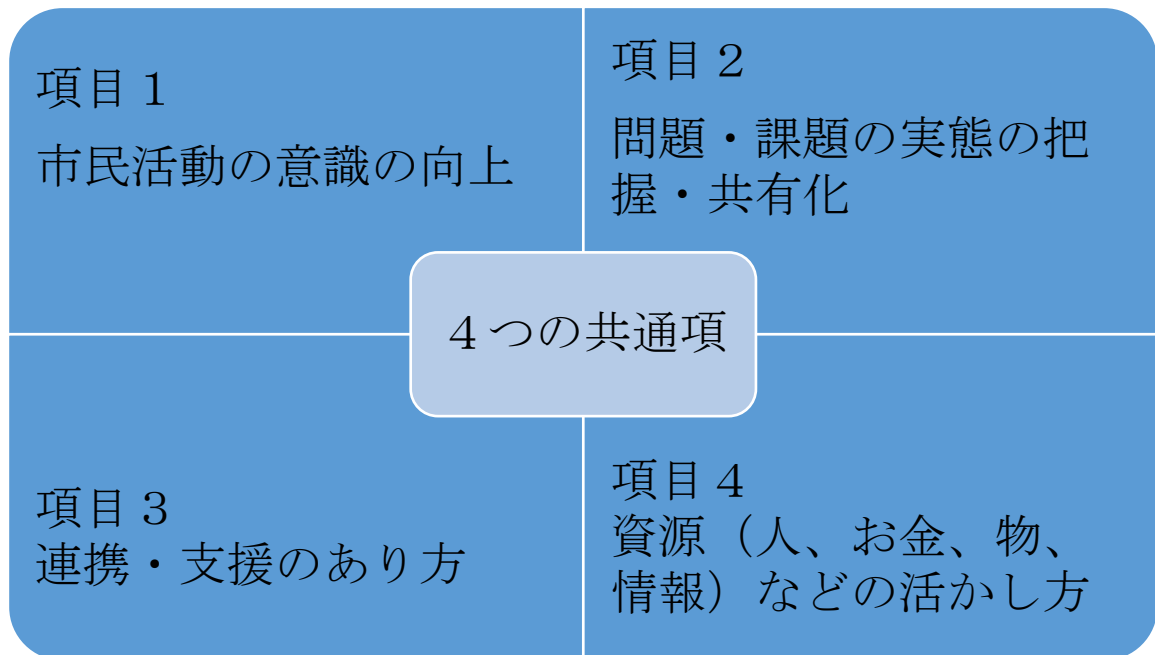


中間発表の内容について

1. 中間発表における4つの共通項 抜粋



項目1：市民意識の向上

- ① ‘向こう三軒両隣’の重要性を再認識する⇒日頃の「挨拶」「声掛け」
- ② 防災という“命”“生活”に関わることからすれば、主体的に登録するもの
と考える
- ③ 地域内で防災グッズを配布するなどして「つながり」をもつ
- ④ 炊き出し訓練・練習という「みんなで作り、食べる」というプログラムを演
出して、地域の子どもやその保護者（若者世代）を呼び込みながら、異世代
交流も進める
- ⑤ 小学校体育館を利用した宿泊訓練を取り入れることで、児童生徒・PTA・
学校を巻き込み、自治会やシニア世代とのつながりを作り出す⇒楽しみなが
ら異世代交流
- ⑥ 参加したくない人・関わりたくない人⇒知らないうちに市民活動に参加して
いることを丁寧に説明する（ゴミの分別、散歩による防犯協力など）
- ⑦ カラオケ、踊りなど楽しみを共有して“つながり”をもつ⇒既存カラオケ店
の平日閑散時間を利用した「カラオケ大会」の実施⇒カラオケ店ポスター
を地域掲示板へ
- ⑧ 集った仲間がお互いの人生経験や知識・能力を活かすための人材バンクの設
立・登録地域デビュー大学なる講座開設⇒無理に勧誘するのではなく、講座

- の魅力アップを図り地域デビューの後押しをする⇒「専門課程」「実践講座」など同世代の仲間づくり（団塊世代の男性を地域にデビューさせる試み）
- ⑨ 「サッカーの楽しさを伝えたい」NPO、「新しい知識や技術を身に付けたい」サッカー部高校生・大学生、そして「運動の機会を求める」障がい児と親のコラボレーション
 - ⑩ 障がいを抱える親子のネットワーク（特別支援学校・特別支援学級）と地元サッカークラブに所属している子どもの友人のネットワークを活用
 - ⑪ 大学生ボランティアの発想からでたフリースペースでの活動の実施（ダンス、パソコン、鉄道関連）⇒学校という概念を外した居場所での活動（シニア世代とも交流）
 - ⑫ 人材バンク登録しているシニア世代の力を借りて、学習支援や農業体験につなげる
 - ⑬ 行政からの呼びかけではなく、市民から呼びかける
 - ⑭ 呼びかけの方法を工夫する（スローガン等）

項目2 問題・課題の実態の把握・共有化

- ① 登録カード作成時に「ご近所助け合い欄」を設けて、ネットワークづくりを図る
- ② 登録カードを基にした防災マップ作りを地域ごとに実施
- ③ 保育園や幼稚園にひとり暮らし高齢者や老夫婦を招き、自治会やシニアクラブが出前防災訓練を実施⇒後日、参加高齢者に園児が絵や手紙を贈り交流を図る
- ④ 担い手が減少している消防団のアピールやスカウトの場にする
- ⑤ 既存NPOの成功事例を情報共有
- ⑥ 広報誌、ホームページによる周知⇒効果的な広報スキルを高める（文章表現の仕方、レイアウト、色使いなど）
- ⑦ 保健推進員、民生委員で健康に関する情報提供しながら周知
- ⑧ 市内各区の地域サロン情報交換会
- ⑨ 知的障害、発達障害など目に見えない障がいを知らない人が多いことから、市内各地域でミニフォーラムを開催
- ⑩ 子どもが集まるコンサートと連動して障害に関する講演会を開催⇒ 催し物を楽しみながら、障害理解や相互理解を進める
市内特別支援学級・合同発表会にシニアクラブや婦人会などを招待して、地域の一員としての活動や学習発表を参観してもらう
- ⑪ 現状を話し合う機会を増やす
- ⑫ 広報・回覧版を活用し現状を周知させる

項目3 連携・支援のあり方

- ① 防災訓練に「宿泊」というプログラムを入れることで、自治会、防災課、学校関係者、PTA、シニアボランティアなど、従来にない“より現実的な”訓練が可能となる
出前防災訓練（保育園、幼稚園、学童保育所、福祉施設など）
- ② 地域の福祉施設やフォーマルな地域サロンと定期的に交流を図る
- ③ 地域サロンに子どもを招待して、昔遊びや読み聞かせ、おやつ作りなどして異世代交流を図る
- ④ 自治会、町内会などの会合やシニアクラブの活動を地域サロンで開催する
地域サロンをコミュニティカフェと位置付け、健康相談・お悩み相談など問題が深刻化する前に、気軽に相談できる場とする（一時避難の場としても活用）
- ⑤ 大学生や高校生のサッカー部員という若き世代との交流の場を作り出すことで、サッカー以外との交流の場を作り出せる（ダンス部、演劇部、合唱部など）
- ⑥ 障がい者の特性と学生ボランティアの主体的関わり（得意なこと、好きなこと、やりたいこと）とのコラボレーションで理解と交流を図る⇒ アニメ・マンガ祭りの企画、広報、運営⇒駅前空き店舗、大型スーパースペースを活用し、アニメ好きの親子を巻き込んで相互理解に努める
- ⑦ ダンス・演劇などの活動発表の場として、老人ホームや保育所などを訪問する（人から感謝される経験をすることは、自信回復や自尊感情を高めるだけでなく、核家族で失った人間関係を回復するキッカケにもなる）
- ⑧ 民間企業とタイアップし、個別の活動を連携させる
- ⑨ 活動を必要とする側と提供する側をつなぐコーディネーターを配置する

項目4 資源（人、お金、物、資源）などの活かし方

- ① あくまでも自治会・町内会の“向こう三軒両隣”という「近くに住んでいる人」が重要な“つながり”“見守り”の基本となる事を再確認する
- ② 元気な高齢者が、今後も地域の重要な担い手であることを考えると、人材バンク登録やシニアボランティア登録を実施して、主体的に技術・経験・能力を活かせる場を作り出す（移送支援、買い物支援、学校支援、学習支援、援農など）
- ③ 既存の公民館、コミュニティセンターを活用して、炊き出し訓練を行う⇒この炊き出し訓練をキッカケに「食事を楽しむ会」「地元産食材を楽しむ会」などに発展させる⇒その集まりにひとり暮らし高齢者や老夫婦を招待またはお弁当として配食する
- ④ 既存NPOから講師派遣やガイドブックを作成してもらおう⇒欲しい情報を市民側から作り、情報を共有する
- ⑤ 地域の空き家を活動拠点として利用できるようにして、地域の集いの場を作り、自らの経営も成り立たせていく取組⇒NPOの立ち上げ援助（資金助成、

空き家対策)

- ⑥ 地域サロンへの外出支援をシニアボランティア（福祉有償運送）にお願いする
- ⑦ 外出・移送支援（買い物支援、通院支援）については、社会福祉法人所有の車の空き時間を利用した取り組みも考える⇒社会福祉法人は利潤を内部留保せず、積極的に地域に還元するという政策が打ち出されている
- ⑧ 既存のサッカーNPOを活用することで、活動の窓口を広げる⇒若者世代との交流
- ⑨ 自立支援協議会から助成を受け、活動領域を広げる
- ⑩ 学校資源を有効活用して、全ての子どもたちの放課後支援をする（障がい児や不登校児を含め）⇒シニア世代の経験や能力を活かして、学習支援・運動支援・体験学習を実施⇒6年生までの学童クラブ構想 ※学習支援については、ひとり親世帯には大きな支援となる
既存の障害者団体が、障害種を超えて“つながり”をもち、「障害のある人もない人も、お互い“ありのまま”“対等”に暮らしていきましょう」というノーマライゼーションを八街に根付かせる活動をする
- ⑪ 新しい組織を立ち上げるのではなく、既存の組織を充実させ利用する
(例) 通学路の見守り隊を活用し、張り出し樹木の通報等の道路パトロールを充実させる

2. 中間発表におけるキーワード

- ・向こう三軒両隣
- ・地域のつながり
- ・あいさつ、声かけ
- ・地域サロン
- ・情報収集、情報提供、情報共有
- ・マッチング
- ・点ではなく面での取り組み
- ・横の連携
- ・学校の空き教室の活用
- ・商店街の空き店舗の活用
- ・区のコミュニティセンターの活用
- ・コーディネート
- ・コーディネーター・ボランティア育成・動機付け
- ・人材バンクの設立
- ・協働まちづくりセンターの設立
- ・基幹産業である農業を活用する。

3. 関谷先生のアドバイス（中間発表講評重点内容抜粋）

- ・指針を作成するにあつたての2つの柱
 - 1点目：様々な人が共有できるような考え方、連携の手法、仕組み、制度、原則はどのようなものか。
 - 2点目：原理原則だけでなく豊かなアイデアと一緒にあった指針を作成する方向で作業を行う。
- ・発表の内容として行政の視点での内容が少なかったため、行政が成すべき役割は何かをもっと検討する。
- ・アイデアをもった市民が提案していくための環境づくり。市民の立場から見てどういった環境があれば提案しやすいか。
- ・指針とプラスして、アイデア集的なものが報告できるように議論する。

4. 分科会最終報告に向けて

1月の分科会最終報告においては、各分科会のテーマに共通する協働に関する原則、連携手法、仕組み等について、どのようなものが考えられるかを議論し報告してください。

また、指針の中に各分科会のテーマに沿った具体的なアイデアも掲載したいと考えているので、それぞれのテーマのアイデアを集約し取りまとめて報告してください。